

ミカン生育情報

千葉県
平成 29 年 9 月号

平成 29 年 8 月の気象

平成 29 年 8 月の半旬別の気象を表 1 に記した。平均気温は第 1、第 3 及び第 4 半旬で平年を下回った。月平均気温は 25.6℃で、平年及び前年より 0.4℃低かった。

降水量は第 2 及び第 4～第 6 半旬で平年を下回り、第 5 半旬には降雨がなかった。月合計は 140mm で、平年の 97%、前年の 60%であった。

日照時間は、第 2 及び第 5 半旬を除く 4 半旬で平年を下回った。月合計は 156 時間で平年の 72%、前年の 92%であった。

台風 5 号が 8 月 7 日に紀伊半島に上陸し、近畿地方から北陸地方を通過したが、直接の影響はなかった。

表 1 平成 29 年 8 月の気象 (暖地園芸研究所)

半旬	平均気温(℃)			降水量(mm)			日照時間(hr)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	24.5	26.0	26.1	78	21	20	15	36	31
2	27.4	26.1	27.2	4	27	0	38	36	42
3	23.7	26.2	25.0	53	25	0	4	35	29
4	25.0	26.0	26.4	2	22	75	17	35	11
5	27.3	25.9	26.1	0	19	130	44	35	18
6	25.9	25.7	25.4	4	30	7	37	40	38
平均/計	25.6	26.0	26.0	140	144	232	156	217	169

果実及び樹の生育

調査園地と暖地園芸研究所の本年度の温州ミカンの園全体の着果量は、園地や樹によるバラツキはあるものの、早生温州、普通温州ともに平年より多い傾向である。

肥大に関することとしては、7 月中は降雨が少なく、樹体には強い水分ストレスがかかっていたと考えられるが、8 月前半は曇天・雨天が多く水分ストレスがかかりにくい気象条件であった。このため、前回調査からの肥大量は平年値を上回る調査区(品種・調査地)が多く、前年との比較では 1 調査区を除き上回った。平年や前年に比べ肥大が緩慢だった調査区に関しては、乾燥しやすい園地の条件であったり、品質向上やサイズ調整を狙い着果を多くしていたり、様々な要因が肥大に影響したと考えられる。

着色に関しては、暖地園芸研究所内の「日南 1 号」で緑色が抜け始めている果実がある。

暖地園芸研究所内では、果実の直射日光が当たる部分に日焼けの発生がみられ、極早生温州や「せとか」での発生が多い。

また、温州ミカンや一部中晩柑で裂果している果実が散見された。

9月1日における各調査地の果実の生育を表2に示した。調査地の横径、縦径の
 平年比は早生温州がそれぞれ、100%、103%、普通温州がそれぞれ103%、102%と
 なっており、前回調査に引き続きおおむね平年並みである。

前年と比較すると、早生温州が97%、103%、普通温州が99%、101%となっ
 ている。極早生温州「日南1号」は、横径、縦径が前年比106、110%であった。前回
 8月1日の調査よりも、前年値を上回る調査区が多くなった。（詳細なデータに
 ついては紙面の都合上省略）

表2 果実の生育*¹（平成29年9月1日）

No.	種類・品種	調査地	横径 (cm)		縦径 (cm)	
1	興津早生	三 芳	4.8	(97)	4.3	(101)
2		千 倉	4.9	(97)	4.2	(100)
3		暖地園研	5.2	(105)	4.5	(107)
4	大津4号	三 芳	5.3	(107)	4.3	(105)
5		千 倉	5.4	(103)	4.2	(103)
6		暖地園研	5.3	(105)	4.1	(103)
7	青島温州	三 芳	4.9	(99)	4.2	(100)
8		千 倉	5.0	(100)	4.1	(101)
9		暖地園研	5.2	(104)	4.1	(102)
10	川野夏橙	暖地園研	6.8	(102)	5.9	(100)
11	日南1号	暖地園研	6.0	(106) * ³	4.9	(110) * ³
	平均* ²	早生温州	5.0	(100)	4.3	(103)
		普通温州	5.2	(103)	4.2	(102)

() の数字は平年値（平成8～27年の平均）を100とした比数 ※日南1号は2015年から調査

* 1 各地点の各品種の値は40果の平均値 ただし、落果により調査果実を変更した樹がある

* 2 早生温州：No.1～3の平均、普通温州：No.4～9の平均

* 3 「日南1号」は前年の値を100とした比数

病害虫の発生（暖地園芸研究所内）

一部の樹にミカンハダニが発生している。夏季のマシン油乳剤の散布、及び、7月
 の殺ダニ剤の散布を行ったが、サビダニの被害果が目立つ圃場がある。温州ミカンや
 一部中晩柑で、幼果期にカメムシに吸汁されたとみられる被害果実がみられた。

かいよう病の発生は、圃場及び樹でバラツキがあるが、レモンで無～甚の程度で
 発生している。その他中晩柑、高糖度系温州では、ほとんどの樹で無～軽である。
 そうか病は、「大津4号」の樹の風当たりが強い部分で多く発生が見られるが、
 研究所内全体的には散見される程度である。

9～10月の栽培管理

・摘果

9～10月にかけて、早生温州の樹上選果と普通温州の仕上げ摘果及び樹上選果を行う。仕上げ摘果では、裂果、傷果、日焼け果、腰高果、外周部の大玉果、内裾部の小玉果等を取り除き、適正着果量（適正葉果比：早生温州では30葉に1果、普通温州では25葉に1果）まで摘果する。樹上選果では収穫や運搬・選果の労力を削減するため、商品価値の低い上向きの大玉果や2S以下の小玉果、傷果を樹上から取り除き、果実品質を揃える。中晩柑類の摘果は、品種により時期・葉果比が異なるため、事前に調べ、自らの園の特性に合わせた方法を考え実施する。

・浮皮症の軽減対策

浮皮症は着色期の高温多湿により増加する。園地の通風を良くし、排水の点検を行い乾燥に努め、浮皮になりにくい下垂した果実を残し、上向きの大玉果を摘果する。また、収穫前までにカルシウム剤を20～30日間隔で2～3回散布する。

・病害虫の防除

果樹カメムシ類 園地の立地条件により飛来する量が異なる。カンキツへの加害は9月下旬頃から増加するとされている。加害により、落果や食べる際に果皮がむきにくくなる等の被害が出る。日暮れ頃に園を見まわり、飛来数が多い場合は、薬剤防除を行う。防除は動きの緩慢な朝方か、飛来の多い夕方に行う。

今年は、秋以降園への飛来が多くなる恐れがあるので、特に注意をして見回りを行う。

ミカンサビダニ 被害が多発した園では防除を行う。この時期の被害果実は茶色～黒褐色になる。10月までは果実を加害する可能性がある。

ミカンハダニ 気温が低下し始める8月下旬以降に増殖する。この時期の加害は果実の外観を悪くするため、収穫期まで発生に注意し防除を行う。9月以降の防除の目安は、寄生葉率20%（樹を見て葉10枚のうち2枚にハダニが寄生している状態）である。ダニ類の防除の際には、農薬に抵抗性を持ったダニの発生を防ぐために、同じ系統の成分を含む殺ダニ剤の連用は避ける。

褐色腐敗病 発生が常態化している園や、発生が心配される気象条件の場合は、予防的に農薬を散布する。

青かび病・緑かび病 樹上、貯蔵中、出荷後に発生する。発生の予防にはベフラン液剤25（2000倍液）※を散布する。

防除に際しては、千葉県農作物病害虫雑草防除指針を参考に行う。

※農薬の登録内容は変更になる場合があるため、農薬使用の際は最新情報を確認する。

なお、表の数値は表示単位未満を四捨五入したため、合計値と内訳の計は一致しない場合があります。

《生育情報の問合せ先》千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 特産果樹研究室 電話 0470-22-2961※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生育情報」でも御覧いただけます。

<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>